The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』（下）
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2016, 15, p. 37-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

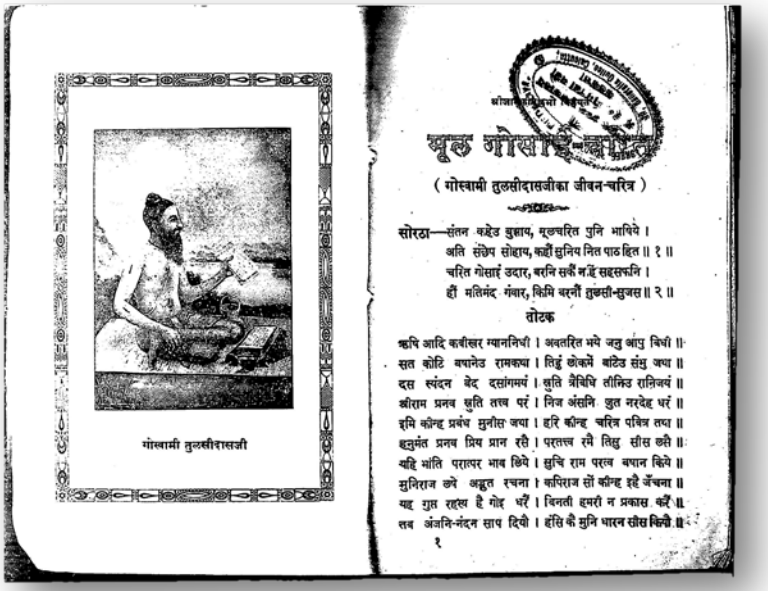
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベーニー・マーダオ・ダース作

『上人伝要解』（下）

長崎　広子



गोस्वामी तुलसीदासजी

श्रीगणेशाय नमो नमः

मूल गोसाईं-चरित

(गोस्वामी तुलसीदासजीका जीवन-चरित्र)

सोरठा—संतन कहेउ बुझाय, मूलचरित पुनि भाषिये ।
अति संछेप सोहाय, कहौं सुनिय नित पाठ हित ॥ १ ॥
चरित गोसाईं उदार, बरनि सकैं नहिं सहसफनि ।
हौं मतिमंद गंवार, किमि बरनौं तुलसी-सुजस ॥ २ ॥

तोटक

ऋषि आदि कबीसर ग्याननिधी । अवतरित भये जनु आपु बिधी ॥
सत कोटि बषानेउ रामकथा । तिहुं लोकमें बांटेउ संभु जथा ॥
दस स्यंदन बेद दसांगमयं । सुति त्रैबिधि तीनिउ रानिजयं ॥
श्रीराम प्रनव सुति तत्त्व परं । निज अंसनि जुत नरदेह धरं ॥
इमि कीन्ह प्रबंध मुनीस जथा । हरि कीन्ह चरित्र पवित्र तथा ॥
हनुमंत प्रनव प्रिय प्रान रसै । परतत्त्व रमै तिसु सीस लसै ॥
यहि भांति परात्पर भाव छिये । सुचि राम परत्व बषान किये ॥
मुनिराज कये अद्भुत रचना । कपिराज सों कीन्ह इहै जँचना ॥
यह गुप्त रहस्य है गोद धरैं । बिनती हमरी न प्रकास करैं ॥
तब अंजनि-नंदन साप दियो । हंसि कै मुनि धारन सीस कियो ॥

१

ギータープレス版『上人伝要解』

後編解説

『印度民俗研究』第 14 号掲載の「ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』(上)」は、トゥルシーダース上人がシヴァ神のお告げに従って、サンスクリットではなく民衆の言葉で『ラームチャリットマーナス』を著すことを決意する場面で終了した。それにつづく本稿である後半は、トゥルシーダースがラーマ神の生誕地アヨーディヤーにて、２年あまりで『ラームチャリットマーナス』を完成させる描写から始まる。『ラームチャリットマーナス』が瞬く間に民衆の支持を獲得する一方で、聖地ベナレスのパンディットたちによる執拗な迫害、多くの詩人や友人との交流、その他の作品の執筆をへて、トゥルシーダースがこの世における自らの使命を果たしたと自覚し、ヴィクラマ歴 1687（西暦 1630）年にこの世を去るまでが描かれている。

後編の物語は、トゥルシーダース礼賛を軸として、彼のおこした奇跡、同時代の詩人や信徒さらには歴史上名だたる人物との交流の逸話がそれを飾るという構成になっている。ラーマ物語を民衆のことばで著すという自らの役目を自覚してからは迷いが消え、彼の心理は後編ではあまり描写されていないが、自らの苦難のときにはハヌマーン神に祈りを捧げて救われるという点ではいくらか推し量ることができる。だが他者に対しては弱きを助け、驕る者を諌めるという姿勢が貫かれている。そしてトゥルシーダースのおこす奇跡は前編よりもさらにスケールアップし、未亡人の窮状を憂慮して死んだ夫を生き返らせたり、男として育てられた女の性を真に男性に転換させたり、詩人ケーシャブダースの幽霊を救済し、貧しい者を富める者にし、ヨーガの力を使って空を飛んでシッダのもとを訪れる等、もはや人間業ではありえないものばかりである。

同時代の多くの詩人や信徒との交流を描いている点が、本書の意義として認められる。そのなかで、ヴァッラバ派の八詩仙のひとりのナンドダースがトゥルシーダースと兄弟弟子であることが記され、著名な『信徒列伝（バクトマール）』の著者ナーバーダースとの面会の際にクリシュナ像がラーマの姿で顕れた逸話は、トゥルシーダースのラーマ信仰（バクティ）がクリシュナ信仰をも包含することを強調しているのだろう。また、『ラームチャンドリカー』の著者である詩人ケ

ーシャブダースの幽霊の救済や詩人ガングに呪いをかけて死に至らしめたとする逸話も、トゥルシーダースの優位性を示していると解釈できる。だが、実際にガングはムガル皇帝ジャハーンギールに嫌われ象によって処刑されたとされており、それをトゥルシーダースの呪いとする本編の逸話は、トゥルシーダース礼賛としての性格を強めるあまり、事実を歪曲しているといえよう。

トゥルシーダースのその他の作品創作にまつわる逸話も後編では語られている。末世から救うために懇願集『ヴィナヤ・パトリカー』を著したことや、カーシーで流行った疫病をしずめる為にカヴィット詩を描き、腕の痛みに悩まされたときには『ハヌマーン・バーフカ』を著したという。また、9日間に分けて行う『ラームチャリットマーナス』の朗唱の方法も描かれているが、これは今日インドでもっとも普及しているギータープレス社のテキストに記載されている箇所と一致している。ちなみに、筆者がこれまで確認した『ラームチャリットマーナス』の写本には、この記載はなく、なぜギータープレス社のテキストに記されているのか興味深い。

歴史上名の知られた人物としては、ムガル皇帝ジャハーンギールとの面会や、ムガル帝国の将軍で詩人ラヒームが挙げられる。このラヒームとの交流は、その後トゥルシーダースが『バルヴァイ・ラーマーヤナ』を著した根拠としてしばしば引用される有名な逸話である[1]。

なお、トゥルシーダースが特に親交を深めた人物としてトーダル・マルが再三登場する点に、本書の成立との関連性を指摘しておきたい。本書に登場するトーダル・マルはムガル帝国の武将ではなく、聖都ベナレスの大地主である。彼の財産分与にトゥルシーダースが立ち会い、彼の死を親友として悼む描写は、他のトゥルシーダース伝には確認できない。また、真偽のほどは定かではないが、Śyāmsundardās[1931: 108-9]によれば、トーダル・マルの子孫が所有する書付にはトゥルシーダースの筆によるとされる祝祷と二行詩が記されているという。本書が地主トーダル・マルとその子孫に近い人物によって創作された可能性は今後の研究課題

[1] Snell[1994: 380]がこの逸話を引用していることからも、その重要性がうかがえる。

である。

また、前編の解説でも触れたが、本書の創作年代にはさらなる議論が必要であろう。後編で描かれた内容から推察できる点をいくつか示したい。まず、『信徒列伝』（1600 年）の著者でトゥルシーダースと同時代のラーマーナンディ派の宗派の伝記作家ナーバーダースとの面会が描かれているが、『信徒列伝』におけるトゥルシーダースに関する描写はわずか 6 行詩と極めて短く、彼らが実際に会ったかどうかは分からない [2]。二人の出会いは、ナーバーダースからおよそ 100 年後に『信徒列伝』の注釈としてプリヤーダースが著した*Bhaktirasabodhinī*（1712 年）に描かれている。妻への愛着とハヌマーンを介してラーマを拝する前編で紹介した逸話にくわえて、後編で描かれているナーバーダースとの面会、クリシュナ神像がラーマの姿で顕れた逸話、人殺しをしたバラモンの救済、寡婦のために死んだ夫を生き返らせる話、聖都カーシーでのパンディットによる迫害、トゥルシーダースの家に忍び込んだ泥棒をラーマ神が追い払う話、デリーの皇帝による幽閉は、まさにプリヤーダース版と共通する。ということは、本編がプリヤーダース版を採用したのか、あるいはその逆か、はたまた同じ逸話がたまたま偶然に描かれたのだろうか？おそらく、本編がプリヤーダース版の逸話を採用した可能性が高い。なぜなら、あまりにも描写が近似しているため、偶然に同じ逸話が描かれたとは考えにくく、もし逆にプリヤーダースが本編を読んで描いたならば、本編に描かれた他の多くの逸話を採用しなかった理由を見いだせないからだ。このことから、『上人伝要解』は少なくともプリヤーダース版の 1712 年よりも後に描かれ、したがってテキストの最後に記されたヴィクラマ歴 1687（西暦 1630）年という執筆年は偽りとなる。

それでもなお、本書の意義は計り知れない。トゥルシーダースと同時代の信徒や人物を知るうえで、ナーバーダースの『信徒列伝』を凌駕する情報を有しているのである。本編に記された人物のなかで特定できる者については訳注に記したが、判別できない者も多かった点をあらかじめお断りしておく。

---

[2] 拙稿[長崎 2011: 161]に、『信徒列伝』のトゥルシーダースの記述の全訳を掲載している。

テキストの該当箇所を、dohā の番号を[ ]に入れて、訳出内に示した。

****

上人伝要解
（トゥルシーダース上人伝）
[後編]

王の会議でウダヤ [3]が高い尊敬を集めていた日に、聖なるトゥルシーダースはアヨーディヤーに到着した[D37]。

ある日サラユー河に沐浴に行った。喜悦し河沿いの路地を歩いていたとき、一人の信者（サント）に会い、「美しい庵を見るだけで、辰砂 [4]がつく」と、彼は語りだした。[トゥルシーダースを]連れて行ってそのすばらしい場所を見せた。その神聖な庵には木の若枝が連なっており、その間に一本の大きな木があった。その根元に美しい祭壇があり、その上で火の苦行で知られた一人の聖者が達人座をくんで座っていた。その場所を見てトゥルシーダースは魅了され、そこに庵を結んで住みたいと思った。聖者のそばに近づくと、その聖者は座法をとき、万歳三唱した。その聖者は語った。「我が師が命じたために、私はここに住んでおりました。師はすべての秘密を語り聞かせ、今それを私は目の前で見ております。師はこう語りました、『シッダは後ろの庵に住みなさい。数日後にはトゥルシーダースがハリ（ヴィシュヌ）の名声を語るであろう。最初の詩人（ヴァールミーキ）の降臨であるトゥルシーダースがこの庵を訪れ、ハヌマーンの力を得て、ハリ（ヴィシュヌ神）の名声を語るであろう。この地で王の中の王は最も平らな自制という木を植えた。私の意を受けて、暮らす準備を整えて、住みなさい。そのために、フラシーの息子（トゥルシーダース）がこの場所に来たとき、庵をすぐさま[彼に]譲り、その身を捨てて私のそばに戻りなさい』。師の令は私にとって善きもので、転生を繰り返して

---

[3] 同名の詩人がいたようだが、詳細は不明。

[4] mahabīrī.ハヌマーン神像に塗られることから、その吉兆の色とみなされる。

得た功徳です。この祭壇に住んで、バクティの喜びを得て、苦行し、あなたが来られるのを待っておりました。今ここであなたさまが喜んでおられますので、我が師の暮らすところに私は参りましょう。」

こう言って、かの聖者は祭壇から降り、頭を下げて進み、遠くに離れた。そこで座をくんで、瞑想した。その苦行の火で、彼の身体は燃え上がった。この光景を見てトゥルシーダースは言った—「弓を持つもの（ラーマ）よ。あなたにすべてを捧げます。そこに住み、幸福と安寧があり、私のヨーガが強い制御を獲得しますように」[一日に]一度牛乳を飲むだけで、ラグ族の英雄（ラーマ）を信じて何も不安を感じなかった。2 年がすぎ、様子は変わらなかった。ヴィクラマ暦 1631 年になろうとしていた。

トレーター期にラーマが生まれた日にあったように、ヴィクラマ暦 1631 年に刻、惑星、宮が重り[D38]、第 9 日の吉兆の火曜日早朝にハヌマーン神が顕れ、この世に安寧をもたらすために、[上人に]まず灌頂を行った[D39]。シヴァ神、ガウリー女神、ガネーシャ神、サラスヴァティー女神、ナーラダ聖仙、シェーシャ、賢人、太陽、詩人、グル、神はめでたい祝福を与えた[D40]。こうして、それを聞けば、恍惚と傲慢、欲望などのすべての欺瞞が消える、清らかな『ラーマチャリットマーナス』[の執筆]が始まった。

2 年 7 か月と 26 日が過ぎた。ヴィクラマ暦 1633 年アガハン月のラーマの結婚した吉兆の日。輪廻の海を渡るための神聖な 7 つの船(『ラームチャリットマーナス』の 7 巻)が完成した。偽善、ごまかしを消し去り、神聖で正しいダルマを行わせ、末世の罪と山を消し去り、ハリの信愛（バクティ）の美しさを見せ、主義主張の紛争をなくし、愛の書物を読ませ、信者（サント）の心に愛を抱かせ、賢者の胸に喜びを増幅させ、ハリの真髄をあらゆるところで理解させ、聖典によって認められた道を示すための、7 巻からなる本が完成した。新たな体裁のすばらしい本になった。

白半月火曜の吉兆の日に、その 7 つの岸 [5]に、神の群は万歳を唱え、喜び、花の雨を降らせた[D41]。この本を書き始めたのと

---

[5] 『ラームチャリットマーナス』の 7 巻が末世の拠り所あるいは輪廻転生の海の岸という意味か。

同じ日に完成した。か弱い人（トゥルシーダース）がとても長い書物を書き上げた[D42]。５行は神の筆でガネーシャ神が著した。信者、シヴァ、ナーガ、空の神、方位の神、人々はすぐさま向かった。すべての心に『ラームチャリットマーナス』は住み着いた。聖仙詩人のハスの御足を神聖な心と行いと言葉によって称えた。世間のために偉業をなしたトゥルシーの御足を称えよう。末世の海で溺れる者を救う７つの船が現われた。トゥルシーの著したラーマ物語は、最高に甘美で神聖な行いであり、四大目的（ダルマ、財、性愛、解脱）を与え、ガンジス河のようなラサの宝庫である[D46]。

ハヌマーン神が現われ、最初から最後まですべてを聞き、三界の名誉を支配するという幸運な恩寵を与えた。

ミティラー国のサントで賢者がいた。彼はミティラーの王（シーター妃の父ジャナカ王）に心酔していた。その名はルパールナ・スワーミーで、その時彼はアヨーディヤーに来ていた。ゴースワーミー（トゥルシーダース）が権威者と認め、彼が最初にこのマーナスを聞いた。スワーミー・ナンド・ラールの有徳の弟子で、その名もダヤール・ダースがいた。彼は本を書き写して自らの故郷に戻り、師のところに行ってそれを聞かせた。ヤムナー河岸に行って、３年間[詩人]ラスカーン[6]がそれを聞き続けた。その時からたくさんの本が書き写され、何人かは自分の手元に置いた。

ムクターマニ・ダース[7]がやって来てハリの子守歌を聞かせていた。その気持ちに上人は喜び、すぐに神通力を与えた[8]。

その時、ヴィシュヴァナート神とパールヴァティー女神に書物（『ラームチャリットマーナス』）を読んで聞かせるようにというハリ（ラーム）の命を受けて、[トゥルシーダースは]カーシーに

---

6 イスラム教徒の生まれで、ヴァッラバ派のヴィッタルナートの弟子となり、クリシュナ信仰のカヴィット・サワイヤー詩を描いたことで知られる詩人。
7 カビール派の信徒か？
8 神通力を与えて祝福したの意味。

行った[D47]。[トゥルシーダースが]書物を読み終えると、夜にはそれをシヴァ・リンガのそばに置いた。愚かな学者と苦行者たちが早朝覆いを取ると、すべての人々は疑いの目で見た。シヴァ神がきちんと並べ直していた。神の文字で書かれたものを読みあげる声を聴いた。「シヴァ神は真理であり美しい」シヴァの町は喜びの色であふれ、この遊戯（『ラームチャリットマーナス』完成の喜び）はすべてを埋め尽くした。男も女も喜び、あいさつをした。万歳の声を挙げ、[他人の]災厄を引き受けた[9]。

しかし学者たちは考え込んだ。すべての尊敬と権威と生計を失ったと思った。恩寵を与えるこの本を読めば、もはや誰が[我々に]意味を問おうか。徒党を組み、彼らは[『ラームチャリットマーナス』を]中傷しつづけた。神の言葉（＝サンスクリット）を必死になって賞賛しつづけた。ある者は本を盗もうと企んだ。悪い奴らは様々な悪巧みを考えた。ニドゥアーとシクアーという二人の泥棒が[トゥルシーダースのもとに]向かったが、門番を見て魅了された[10]。[翌日]彼らはトゥルシーダースにあの場所にいたのは誰かと尋ねた。「黒い者と白い者の二人が弓を持っていた」話を聴いて目に涙があふれ、[トゥルシーダースは]言った—「お前たちは幸せ者だ。ハリに会うことができて」悪い行いをやめ、どろぼうはすべての盗んだものを返した。

しっかり保管するように、本をトーダル・マル[11]の家に持って行った[D48]。そして別の写本を丁寧に作った。そこから次々と写本が作られ始めた。どんどん広まり続けるのを見て、すべての学者たちは不平を言って困惑した。

バテーシュヴァル・ミシュラは祈祷師であった。学者たちは泣いて悲しみと苦しみを訴えた。[トゥルシーを]殺すための[祈祷の]準備をした。バイラヴァ神を必死に念じて向わせたが、ハヌマー

---

9 挨拶として、他人の災厄を引き受けるという意味で、しぐさと言葉でそれを表現する。現在では女性が親しい者との別れ際にすることが多い。

10 原文では nihālanā「嬉しくなる」だが、nihāranā「うっとりする、魅了される」で解釈した。

11 トーダル・マルはおそらく大地主で、トゥルシーダースと生涯にわたって親交を深める人物であることがこの後の記述から分かる。同名のムガル帝国の武将とは別人物であろう。

ン神のような門番を見て恐れをなし、戻ってバテーシュヴァルの命を奪った。その時、失望した彼らは徒党を組んでマドゥスーダン・サラスヴァティー[12]の僧院に行った。彼らは言った—「シヴァ神はこれ（『ラームチャリットマーナス』）にお墨付きを与えたが、これがどのような種類のものかは語らなかった。これがシュルッティ（天啓聖典）、シャーストラ、プラーナ、イティハーサ（歴史）のどれと同等と言えるのかご教示ください」

苦行者の王（マドゥスーダン・サラスヴァティー）は言った—「その本を持ってこさせなさい。本を見てから言おう」

苦行者(マドゥスーダン・サラスヴァティー)は持ってこさせた本を読むと、[その心に]最高の喜びが生じた。詩文を書いて渡した。「存在、想念、喜びは勝利する[D49]。この喜びの森（カーシー）には、歩き回るトゥルシーという木がある。詩という花房は、ラーマという蜂によって飾られ輝いている」

学者たちがやって来て彼に言った—「シヴァ神に尋ねようではないか」ニガマ、アーガマ、シャーストラ、プラーナ、すべてを順番に置き、マーナスは下に置かれた。早朝になって覆いを取ると、それを見ようと[皆が]押しかけた。ヴェーダの上にマーナスがあるのを見て、すべてのパンディットはその場で恥じ入った。[トゥルシーダースの]足元にひれ伏し、足の聖露をいただいた。[トゥルシーダースは]罪人を許し、[彼らは]家に帰っていった。

ナディヤーの学者であるラヴィ・ダッタは、すべての学問に通じた学者で詩人であった。聖者（トゥルシー）に対して無理に議論をふっかけ、そして負けて心に激しい絶望を感じた。トゥルシーダースが僧院から沐浴に出かけると、[ラヴィ・ダッタはトゥルシーダースを]殺すために棒を持って行った。ハヌマーン神が守っているのを見て逃げた。自らの行いを恥じ、それから行ってトゥルシーダースの機嫌をとり、恩寵を強く要求した。次の恩寵を賜りたいと要求した。「町を離れてください」と。聖者（トゥルシー）は仕方なく恩寵を授けた—「カーシーナートに一言断ってから[町を]離れましょう」カヴィット詩を著し、心を決めた。書いてハル[シヴァ神]の寺に置き、南に向かって出発した。シヴァ神は姿を顕し、何度も説得し、動揺した気持ちを落ち着かせた。

---

[12]不二一元論の哲学者(c.1540–1640)。

[トゥルシーダースの]出立を聞いて[ラヴィ・ダッタは]喜び、参拝に行った。扉が閉まり、激しい怒りの声が聞こえた[D50]－「行ってトゥルシーダースを説得して、足元にひれ伏ししっかりと懇願せよ。（カーシーの）町に連れてきて住まわせよ。さもなくば、お前は破滅するだろう」

それを聞いてトーダル・マルが[トゥルシーダースの元に]来て懇願した—「上人よ、奉仕者の願いを聞きいれてください。愛しいアッシー・ガートに新しい家を作り、ガートも完成しました。安心してそこに住み、喜びを与えてください。[あなたの]ハスの御足を常に我々は崇拝いたします」

[トゥルシーダースは]喜んで受け入れ、その場所に住み始めた。ラーマの徳を称えることに没頭した。

末世が短剣を持って夜にやって来て、上人をとても困らせた。末世は言った—「自らの本を水で濡らせ。そうしなければ、今叩き壊して、不安を与えると理解しろ」こう言って去って行った時に、上人はハリを念想した。ハヌマーン神は語った—「末世は納得しないだろう。私を禁じて大きな憎しみとなるだろう。願いの書を書いて私に託しなさい。その時、尊者よ、[ラーマ神に]末世を罰してもらおう」[13]ラーマ神への有名な[懇願集]『ヴィナヤーヴァリー』[14]を上人はその時創作した。賛歌を含んだこの懇願を聞いて、主は上人の不安を取り除いた[D51]。

[トゥルシーダースは]ミティラーの町に向かって出発した。善い行いの人々に喜びと平安を与えた。ブリグ仙の庵に４日滞在した。徳のない女の罪を滅してやった。ある日上人はハンサプルに滞在した。パラスィーという名の女のために[死んだ]夫を生き返らせた。

ガウ・ガートにあるガンビール王の館で２年間滞在した。

ブラフメーシュワルに参拝して、カーント・ブラフマプリ（ビ

---

[13] 本編の末世の逸話に対応すると考えられる箇所が *Vinayapatrikā* の 32.d.1-5 にある。

[14] 懇願集について、本編ではヴィナヤーヴァリーとされているが、一般に *Vinayapatrikā* とも呼ばれる作品のことである。

ハール）に来た。サンワルーの息子であるマンガルーは牛飼いで、神とサードゥーの世話に熱心で、牛乳を搾って与えていた。恩寵を与えた。「きっぱりと盗みをやめよ。お前の家系は続くだろう」

それからベーラー・パターラ[村]にやって来た。そこでダニーダースが自らの苦しみを語った。大罪を犯し、明日死ぬのだと自分の苦しみを語った—「ラーマの神像が目の前で神饌を食べていると言って、[実は]ねずみに食べさせたのです。ああ尊者よ、ラグナート・シン王はごまかしを知り、怒って言いました。『ラーマの神像が私の前で食べなければ、お前を必ず絞首刑に処す』と」すると上人は慰めた—「サードゥーよ、食事を作りなさい」神像が皆の前で食事をしたのを見て、聖者（トゥルシーダース）は次のように語った—

トゥルシーダースは語る。偽りの信者の名誉さえ主は守る。
施主が愚かな司祭にさえ布施を与えるように[D52]。

自分の家に吉兆をもたらすために、最高の主人（ラグナート・シン王）は上人を連れて行った。そこで信徒ゴーヴィンド・ミシュラに会った。彼の視線で鉄の塊さえ溶けた。上人は村の名前を変更させ、その名はラグナート町になった[15]。

そこから出発し歩き回りながら、リシはハリハラ・クシェートルにやって来た。それから川の合流点であるとき沐浴し、歩き回る人（トゥルシーダース）[16]はビデーハプリに近づいた。ビデーハの娘（シーター）は少女の姿をとり、外に出てきて[トゥルシーダースに]キールを食べさせて去った。真実を知った時、[喜びは]語りつくせない。心の中で[シーターの]ご加護と感謝した。

バラモンたちは[トゥルシーダースが滞在している]ことを知って取り囲んだ。そして自らのつらい苦しみを語った。悪徳の太守

---

[15] ラグナートは、ラーマ神とラグナート・シン王の両方を指しており、その名にちなんで町の名を変更させた。
[16] chapadī. 「黒蜂」から「歩き回る人＝トゥルシーダース」と解釈した。

は大変残酷で、彼は１２の村の仕事と生計を奪った。[上人は]哀れに思い、[己の]なすべきことを考え、風神の子（ハヌマーン神）を念想した。[太守を]罰して再生族の家族を幸せに戻した。

ミティラーからカーシーに行った。ヴィクラマ暦 1640 年になった。穢れのない愛着をもって『ドーハーヴァリー』を編纂した

ヴィクラマ暦 1641 年アガハン月の白半７日日曜日に、読誦のために『ヴァールミーキ・ラーマーヤナ』を再び書いた。

ヴィクラマ暦 1642 年ヴァイシェーク月白半シーターの誕生日に愛で潤された『サトサイー』[17]を著し始めた[D56]。

土星が魚座に降りると、カーシーの町に疫病がはやった。人々はとても哀れな状態に陥り、聖者のもとに助けを求めてやって来た。「ああ主よ」と大きな叫び声を挙げ、全く静止できなかった。「創造主よ、ハリのしもべよ、お助けください」慈悲深い上人は悲しみを聞き、カヴィット詩[18]を著した。慈悲の海（ヴィシュヌ神）に懇願し、疫病を追い払った[D57]。

詩人ケーシャブダースは大変な風流人で、高貴な詩人ガナシュヤームはナブ村の住人[19]であった。詩人は[トゥルシーダースについて]知って、会いに行った。外に立って、[お会いしたいと]伝えた。それを聞いてトゥルシーダースはこう言った—「詩人の性質

---

[17]トゥルシーダース研究者の間ではこの作品は真作とは認められていない。

[18] ここでいうカヴィット詩とは作品集『カヴィターワリー』(7.169, 176, 181)にあるベナレスの疫病に関する詩を指すと思われる。なお、前編最後にもカヴィット詩を著したと記されている[長崎 2015:44]ことから、『カヴィターワリー』は断続的に創作されたカヴィット詩を集めた作品集となる。

[19] Nabha を地名と解釈したが、所在地は不明。なお、Nabha には「空」の意味があり、その場合、ガナシュヤームが「空の住人」すなわち「空を駆け巡ることができる超自然的な能力を有している」となる。

を持つケーシャブ（クリシュナ神）を寄こしなさい」ケーシャブダースはそれを聞くと自らの至らなさを自覚して、すぐに引き返した。使いの者が「お帰り下さい」と言うと、「明日[もう一度]お願いし、お会いしたい」と言った—ガナシュヤーム、ガースィーラーム、バルバドルがいたが、休息をとった。[ケーシャブダースは]夜のうちに『ラームチャンドリカー』を創作した。ケーシャブはアッシー・ガートで愛の色に染まった高誼（サトサング）に加わった。神の栄光のふたつの性質[20]が混じりあった。ケーシャブの迷いは消えた。心の中に愛の詩法が生まれた。

アーディル・シャーヒー王[21]の国の偉大な布施者ダッタートレーヤというバラモンが、聖者（トゥルシーダース）の庵にやって来た。拝んで祝福の言葉を授かり、神聖な恩寵を求めた。自らの手で記したヴァールミーキ・ラーマーヤナを[トゥルシーダースは]喜んで与えた[D59][22]。

アマルナートの苦行者（ヨーギー）の妻を、世捨て人（バイラーギー）が連れ去った。そのため、[首に]数珠と花環をかけた者に[苦行者は]憎しみを抱き続けた。サードゥーたちの間で騒ぎが起こり、聖者（トゥルシーダース）のもとにやって来た。聖者の恩寵によって、再び[彼らは]ヨーガに没頭した[D60]。

戸口でアラクと唱えて[23]、アゴール派の行者がやって来た。すぐに彼の神通力は敗れ、[トゥルシーダースは]四ヴェーダの真髄を諭した[D62]。

ナイミシャの森のあるバラモンはよいダルマの持ち主であった。その名はバナカンディーで、魅力的な声をしていた。消えたすべ

---

20 rasa と kavi の性質。
21 ビージャープルの王。
22 Śyāmsundardās [1931: 114-15]は、カーシーの Sarasvatī Bhavan に収蔵されているトゥルシーダースが記したとされる古文書との関係を指摘している。
23 アラクと唱えて神を念じ、戸口で施しを求める行為。

ての聖地を再興したいと思っていた。そのためにサダーシヴァのマントラを唱えた。ある屈強な化物が近くに現われた。[地中に]埋まっている宝の山を示した。彼が言った—「この富を使って善行をしなさい。この化物の姿から私を救済してください」と。心で喜びバラモンが言った—「私に四大聖地を巡らせてはくれないか。そこでカーシーのトゥルシーダースのいる岸に行きなさい。彼に会えば、お前の利益となるだろう」よいことだと考え、その化者はそうした。空[を飛んで]アッシー[ガート]で降り立った。多くの人々が集まって騒いだ。皆は体を震わせ不思議な出来事を見た。自分の庵から上人は出てきた。空から万歳三唱の声がおこった。化物は尊い姿になってハリの国に上っていった。トゥルシーダースに会ったおかげで、変えられた姿が元に戻った[D63]。

バナカンディーは地に伏し、足に触れて丁寧にあいさつした。上人にすべてのいきさつを語った。「その[聖]地に喜んでお住みください」彼の懇願に従い、上人は聖地を再興するために出かけた。

アヨーディヤーに到着し、聖者の王（トゥルシーダース）は5日間そこに滞在した[D65]。ラーマの栄光を歌う歌い手たちに『ラーマの歌集（ギーターヴリー）』を与えた。心が覚醒したバラモンにすべて金でできた森の地であったアヨーディヤーの美しさを見せた。ガイナーヒーに行き滞在し、その次にスーカラケートに行った。すばらしいスィヤーワール村に住み、そこでシーターの井戸の水を飲んだ。ラクナイプル（ラクナウ）に着いて悦びに満たされた。ゴーマティーの河岸に降りた。あるところでは哀れな者を喜ばせ、あるところではサードゥーたちの心に喜びをもたらし、あるところではラクシュマナの行いを語り、あるところでは愛に没頭して自然に踊り、あるところでは美しいラーマーヤナを歌い、情熱と興奮がわきおこり、あるところでは不幸な人々の苦しみを取り除き、ある時は知識のない者の心に知識を授けた。

貧しい詩人ダーモーダル[24]に祝福を与え、[立派な]詩人にしてやった。多くの富と多くの名声を得て、詩人の世界で匠となった[D66]。

---

[24] ラーダーヴァッラバ派のハリヴァンシャの弟子のダーモーダル［McGregor 1984: 90］か？

そこから最高の信徒（トゥルシーダース）はマリハーバードにやって来て、自ら書いたラーマーヤナをブラジヴァッラバ・バトラージに与えた[D67][25]。

それからコートラー村に行ってアナンヤ・マーダオに会った。母に対する[アナンヤ・マーダオの]教えを聞いて、[トゥルシーダースは]バクティを語って聞かせた[D68]。

それからビトゥールに行き、滞在した。河に沐浴に行くと泥に沈みこんだ。ジャフヌの娘（＝ガンジス河）が手を掴んで引き上げた。その体にまったく傷は残らなかった。

そこからサンディーラーに行った。ガウリー・シャンカラの館に額づいて挨拶した。トゥルシーは言った—「この家にクリシュナの友マンスーカー自身がお生まれになるだろう」
しばらくすると彼は生まれた。名はバンシーダルとなった。「詩人になりなさい」上人が命じた。ラサに満ちた賛歌を聞いて、[クリシュナとの別離を悲しむあまり、彼は]その身を捨てた。ハルワーイー[26]の有名なシッダ・プラヴィーナは、彼が船に乗って空を飛んでいくのを見た。[その船で]高誼[が催されている]を見てうれしくなった。かつての命令[27]は果たされた。

サンディーラーから上人は出発し、途中でチティパールというラージプートにあった。傲慢な考えを持つ彼はあいさつをせず、すぐに貧しい者となった[D69]。バラモンたちは侮辱したために、財産を失った。カーヤスタは尊重し、財産を得て幸福になった。織工は親しく交わり、多くの富と穀物を得た。

ナイミシャの森に到着した。上人はあらゆる方法で敬われた。

---

[25] 現在でもこの写本は現存するという［Śyāmsundardās 1931: 69］。
[26] 菓子屋のカースト。
[27] 詩人になるようにというトゥルシーダースの命令。

調べてすべての聖地を復興し、３か月間暮らした。ピハーニーのシュックラ（？）にヴィクラマ暦 1649 年に会った[D71]。

カイラーバードのシッダ・プラヴィーナの住居に、上人が手段を用いて自ら出向いた。彼を喜ばせて、バナカンディーと２、３の弟子を連れてミシュリクに行った。それから船に乗って、楽しく散策し、ラーマの町（アヨーディヤー）と聞くとそこで降りた。

王の家来は争いをおこし続けていた。すべての者は金品を捨てて、逃げた。ラーマシンハ王は聞くと、走って[トゥルシーダースの]足を掴んだ。懇願してひき止めた。[トゥルシーダースは]そこで引きかえし王のところに泊まった。ハヌマーン神の寺院を建立し、そこが気に入った。その場所をバンシーバンと名付けた。アガハン月の白半第 5 日ラース・リーラーが開催された。そこからブリンダーワンに行って、神聖なラーマ・ガートに滞在した。上人に会いに人々が集まり、聖なるサントたちが集まり、大変な騒ぎが起こった。

スワーミー・ナーバーダース[28]のところにトゥルシーダースが行き、とても敬った。上座を与え、上人は彼を規則にのっとって敬った。バラモンのサントであるナーバーダースとともに、ハリを拝むために歓喜した心でマダン・モーハン（クリシュナ）寺院に行った[D73]。ラーマの信者と知って、信者にやさしい神である主（クリシュナ神）はすぐに弓を持って[ラーマ神の]姿で顕れ、庇護を与えた[D74]。バルサーナーでこの遊戯の噂が広まった。上人の座のそばにはたくさんの人だかりができた。クリシュナ信者は悪意を抱いた。[クリシュナ神がたとえ]弓を持っても、迷いは強くなった。その者に偉大なる真実（ラーマとクリシュナは同一であること）を教えた。「人々の誓願をラーマがお守りにならないはずはない」

聖なる南の国からハリの神像をアヨーディヤーに安置するために、[人々は]向かっていた。ヤムナー河の岸で休むと、ウダヤ[29]と

---

28 『信徒列伝』の著者。

29 本稿の冒頭のウダヤと同名だが、別の人物と考えられる。

いうバラモンが神像を見て魅了され、ハリの神像をそこに安置したいと思った。トゥルシーダースのところに行って懇願すると、持ち上げても持ち上がらないのでその場所に安置した。尊者王（トゥルシーダース）は、この地を称えて、その像の名をカウサルヤーナンダナ（カウサリヤーの息子）[30]にした。

カニャークブジュ・バラモンのナンドダース[31]は[神の]愛に没頭し、彼をシェーシャ・サナータナ・スワーミー[32]がこの岸で教えた。そのため[トゥルシーダースとナンドダースは]同じ師匠を持つ兄弟となっていた。深い愛情を持って[トゥルシーダースに]会いに来た。

ヒト・ハリヴァンシャの息子のゴーピーナートに、[トゥルシーダースは]身よりのない者を住まわせてくれるアヨーディヤーの栄光を語った[D75]。

[トゥルシーダースは]清浄な食物を不浄（食べさし）と言って返した。ハルワー菓子の商人たちの家では子供のクリシュナが[ハルワー菓子を食べちらかす姿が]見られた[D76]。このような遊戯を見せると、バクトたちの心は喜びにあふれた。

チットラクートに行き、数日間そこに滞在した。

サティヤカーマという名のバラモンが上人のもとにやって来た。善行に目覚めて入門のためにやってきた。[彼の心にある]愛欲のゆがみを見てとって、弟子にしなかった。彼は意地になってそこに居座った。夜にカダンバ・ラターという王妃が来ると、その美しさを見るために彼は来て、[明るくなるように]灯明の灯心をかき上げた。それを見て上人は、彼にやさしく諭した。そのバラモンは恥じ入って足元にひれ伏した。上人は[彼の]愛欲のゆがみを

---

30 クリシュナ神がヤショーダーの息子（ヤショーダーナンダン）と呼ばれるのにちなんで、ラーマ神をカウサリヤーの息子という名で呼び、その神像名とした［Śyāmsundardās 1931:128］。

31 クリシュナ信仰のヴァッラバ派の八詩仙のひとり。

32 拙稿「ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』(上)」p.34に、サナータナ・スワーミーがトゥルシーダースに学問を授ける様子が描かれている。

取り除いてやった。

そしてまた[あるときは]、とても貧しいバラモンがマンダーキニー河の大きな水流に身を投げようとしていた。その命を助けるために、聖者（トゥルシーダース）は極貧の終焉をもたらす岩を出現させた[33]。

それから王が家臣を派遣し、トゥルシーダースをデリーに呼んだ。王にティラクを付けにヤムナーの岸辺を行く途中で、[トゥルシーダースは]あるサードゥーの名を有名にした。ラーダーヴァッラバの親愛（バクティ）を教授すると、ラーダーとクリシュナ神は喜んだ。

オールチャーのケーシャブダースが霊となって上人のところに来た。すぐさま救済し、[ケーシャブダースは]乗り物に乗って天国に向かった。

チャルワーリーの地主の娘の美しさに世間は魅惑されていた。[地主の娘は]一人の女と結婚し、[その事実を]知った時にとても悲しんだ。花婿の母は生まれてすぐに[娘を]息子と言って皆に知らせた。[男]にふさわしい服装をさせ、知られた時には[金品を渡して]拝みたおした。そのために大きな誤解が生じた。[地主の娘は]泣いてただただ悔み続けた。人々にすがられて、信徒（トゥルシーダース）の心に深い憐れみが生じた。娘のために9日間の読経をした。[その]分け方は、以下のとおりである。冒頭にhiya, sata, kīnhi, syāma, rāma saila, hāri parā, kaha mārutasuta, jahaṃ tahaṃ tahan, puṇyaの単語がある9つの箇所である[34]。読経を終えるやい

---

33 おぼれる男を助けるために、河の石を浮上させる奇跡を起こしたと解釈できる。現在もチットラクートにはその名の岩があるという。[Śyāmsundardās 1931:131]

34 9日間でラームチャリットマーナスを読誦する際の分け方を示している。Gita Press版における該当箇所は次のとおりである；(1) 1.120.d1, (2) 1.239.d1, (3) 1.358.d1, (4) 2.116.d1, (5) 2.236.d1, (6) 3.29.d1, (7) 6.12.d1, (8) 7.10.d2, (9) 7.130.sh2。なお、7番目の休止箇所は、Gita Press版ではkaha hanumantaである。

なや女は男になり、喜んで言った—「トゥルシーダース万歳、万歳万歳シーター妃とラーム神よ」

5日後、上人はそこからデリーにやって来た。知らせを聞くと、王は[上人を]すぐに王宮に呼んだ[D79]。デリーの王は懇願した—「奇跡を見せよ」[上人がそれを]断ると、牢屋に入れられ、サルたちが騒ぎだした。夫人の服をやぶり、すべての女たちは裸になってしまった。悲鳴が宮殿の中でおこり、[サルは]王をどしんと落とした。[王は] 罪の許しを請い、上人をすぐに釈放した。丁重に見送り、籠で送り届けた[D82]。

[トゥルシーダースは]デリーを去ってマハーバンにやって来た。アヒール族の地で夜を過ごした。バギーラトという一人の牛飼いに好感をもち、彼を立派な信徒で行者にしてやった。

10日後アヨーディヤーに来て、半月間滞在した。信徒ハリダース[35]はすばらしい讃歌を歌うことに没頭していた。その中のいくつかの言葉が正しくなかった。上人が直したが、[彼は]納得せず、その讃歌に支障が生じた。夢で上人にラーマ神が言った—「正しい正しくないではなく、思いをくみなさい」そこで上人は行って、「[いつも]歌っているように歌いなさい」と伝え、彼の気持ちを満足させた。上人は子供の遊戯[の歌]を聞いて満足し、美しい絹布を与えて喜ばせた。

[弟子の]マルークダース[36]を連れたムラーリー・デーオに会った。

聖者はカーシーに到着し、定住した。
神聖なマーガ月にガンジス河の沐浴に行った。河の中でマハー・マントラを唱えていた。老いた体は震え、体毛が逆立った。[娼婦]ガニカーは岸に立って見つめていた。上人が岸に上がり、服を

---

35 クリシュナ・バクティの詩人で音楽家のスワーミー・ハリダースであろう。
36 Khatrīカースト出身のダードゥーパンティー派の信徒で詩人。

とり、[ガンジス河の水滴で清めるために]濡らした。２滴がそのガニカーにかかった。娼婦の心に厭世観が生じ、すべての光景が地獄に見え始めた。[上人から]教えを受けて、すべての罪と欺瞞から解放され、ハリの徳を称え始めた。

バラモンのハリダットはとても貧しく、ガンジス河の対岸に住んでいた。上人のもとに来て、いかに家が哀れな有様であるかという苦難を語った。聖者はガンジス河の賞賛を著し、ガンジス河が土地の災難を取り除いた[37]。

ブライー・サーフという酒売りは上人や親愛（バクティ）の道を批判していた。彼は死に、担架にのせられ、荼毘に伏すために連れて行かれようとしていた[D84]。彼の妻は泣きながら付き添っていたが、上人のそばで頭を下げた。「お前の夫は永遠に存命であるように」と、聖者は祝福を与えた。[妻は]自らの境遇を嘆いて語った。上人は死体を持ってこさせた。甘露を口に含ませると、すぐに[死んだ夫を]生き返らせた[D86]。

その日から上人は勤行に入ることした。そして外に座るのをやめた[38]。行いの善い三人の少年がいた。上人の御足に彼らは献身していた。マニカルニカー[ガート]のリシケーシャと、ヴィシュヴァナート寺院のシャーンティ・パドと、アンナプールナのダーター・ディーンだった。いつも夕刻に神の甘露をいただくのが日課だった。聖者の参拝に毎日来ていた。御足の聖水をいただき家に帰った。彼らの清らかな揺るぎのない正しい思考と愛情を知って、上人は彼らのために外に出てきて姿を見せて、また中に入った。すべての参拝者は噂をし、上人に対して不公平だと責めた。ある日上人は試練を与えた。彼らの気持ちを考えて外に出なかった。三人はその瞬間に死んだが、[聖者の]御足の聖水が生き返ら

---

[37] 土地の災難をとりのぞいたとは、トゥルシーダースのとりなしで、川岸の土地がそのバラモンに与えられたことを指しているのではないか[Śyāmsundardās 1931:131]

[38] 死んだ人間を生き返らせたことが噂になり、外に出られなくなったのだろう。

せた。

ヴィクラマ暦 1669 年春の白半 1 日、天寿を全うしてトーダル・マルは亡くなった[D87]。友との別れに 3 日間上人は深く悲しんだ。友の徳を何度も思い出しては目に涙があふれた。5 か月前アーシュヴィン月白半 13 日、二人の息子の間でトーダル・マルと上人は家[の財産]を分配した[D89][39]。

全身像を描きたいと願う詩人[40]と徴税官ビーシャム・シンがやってきて、上人に会った。二人はハリを拝んで亡くなった[D90]。

[詩人]ガングは語る。「善き人よ、どの象が数珠を繰って念じるのか。数珠をかけた者は偽の信徒だ」と言って、怒った[D91]。平和なラサの色に染まった[トゥルシー]が、ガングを容赦せず呪いをかけた。道で象が飛びかかって、ガングの体を踏みつぶした[D92]。

詩人ラヒームはバルバイ詩を創作し、トゥルシーダースに送った。美しい韻律で書かれたそれを見て、[トゥルシーダースは]その韻律で作品を著した[D93]。

ミティラーで『ラームララー・ナハチュー』とふたつのマンガル作品（『ジャーナキー・マンガル』と『パールワティー・マンガル』）を著した。皆が幸福を得るように、上人は書付[41]を改訂した[D94]。

腕の痛みに悩まされて、我慢強い人（トゥルシーダース）は『ハヌマーン・バーフカ』を著した。

---

39 友人トーダル・マルについては本編冒頭の解説を参照。

40 nakha-siṣa kartā āsu kabi. Āsu という名の詩人とも解釈できるが、訳者はその名の詩人を特定できなかったために、上記の訳になった。

41 prance. prance＜paracā「書付」と解釈して、以前に著した作品を改訂した意とした。

それから『バイラーギャ・サンディーパニー』、吉凶に関する『ラーマーギャー・プラシュナーワリー』、以前に著した小さな作品をもう一度上人は書き改めた。体がとても弱ったので、他の者に書きとめてもらった[D96]。

ヴィクラマ暦 1670 年にそこに[ムガル皇帝]ジャハーンギールがやって来た。富と土地を与えようとしたが、よろしくないと思って[上人は]受け取らなかった。賢人で、雄弁なビールバル [42]の話題になった。知識を得てもハリを拝まないので、上人は遺憾の念を表した[D98]。

アヨーディヤーの掃除婦を愛しいアヨーディヤーの住人と知り、その者をラーマだと思い、愛しさのあまり抱きしめた。

ギリナール山の神仙たちが空から降りてきた。[トゥルシーダースを]拝み、喜び、質問し、[トゥルシーは]それに答えた[D100]。「あなたは愛欲にとらわれていない。とても強いその理由は何なのか？幸福の宝庫よ、どうか教えてください。ヨーガのおかげか、それともバクティの力なのか？」「ヨーガでもなし、バクティでもなし、知識の力でもありません。ただ[ラーマの]御名のおかげです」上人の答えを聞いて、心が魅了され、神仙たちはギリナール山に帰っていった[D101]。

たくさんの人々が聴きに、ガートに座りつづけ、集まった。
宮廷詩人のチャンドラマニがやって来て、足元にひれ伏して懇願した[D102]。「ふたつの時期 [43]を享楽に耽って過ごしてきました。今残っている期間は無駄にさせないでください。今まで人々はすべての感覚器官を笑ったが、これからは主よ、笑わせないでください。喜悦と妄迷、大いなる悪、愛欲、悔しさを私の心から取り除いてください。ラーマの御足の施しで、トゥルシーダースよ、私をカーシーに住まわせてください」願いを聞いて喜び、偉大なるリシ（トゥルシーダース）は言った—「ここにずっと喜ん

---

42 ムガル帝国アクバル帝の宮廷詩人。
43 ふたつの時期とは、人生における家住期と林住期と解釈できる。

で住みなさい。ラーマの徳を称えなさい」

チャンドという名のバラモンの人殺しがやって来た。遠くに立って言った—「ラーム、ラーム」また「ラーム」と。愛しい名を聞いてうっとりし、すぐに抱きしめた。丁重に食事を与え、トゥルシーダースは喜んで言った[D105]－「トゥルシーにとって、あやまってラーマという言葉が発せられたとしても、わが身の皮はその口をもつ人の足の靴[になりたいの]です」[D106]あちこちの路地にすぐに噂が広まった。識者、瞑想する者、バラモン、詩人、学者は夕刻に集まった[D107]。「どうして人殺しが清浄になるのか、言ってください、偉大なるサント（トゥルシーダース）よ」上人は言った—「御名の威光をヴェーダとプラーナで調べてください」[彼らは]言った—「確かに書いてはあるが、信じられません。納得できるように、して見せてください。シヴァ神のナンディンがその者の手で食事をすれば、すべての人々が必ず心から納得するでしょう」[D110]。上人の供物がまさにそのようになり（＝ナンディンが食べた）、四方八方に万歳の声が響き渡った。批判していたすべての者は許しを請い、何度も足元にひれ伏した[D111]。

欲にかられ、ある者が上人のところでラーマの名を一日中繰り返した。夕刻、そのバラモンにハヌマーン神は富を与えた。

カマラバワ[という名の男]はラーマに会わせてほしいと頼むと上人は言った—「木から三叉の戟の上に飛び降りれば、必ず拝めるだろう」[D113]戟をうめて木に登ったが、飛び降りる勇気はなかった。馬にまたがり道を進んでいた一人の西の勇者[44]が[カマラバワを]見た。わけを聞くと[カマラバワは]説明した。勇者はすぐに木に登り、心に確信を持って飛び降りた。神は[勇者に姿を]見せた[D115]。

ついにハヌマーン神は、ラーマの御名こそが創造の木の根源であるとの真理の知識を授けた[D116]。あの世への旅立ちのめでたい時がきたと考え、自らの体調をみて、[真理を]広め、上人は言

---

44 マラータの戦士のことか？

った[D117]－「ラームチャンドラ（ラーマ神）の栄光を語りましたので、もう口をつぐみたいと存じます。私トゥルシーの口に今すぐにカミメボウキの葉と金をいただきたい」[45]

ヴィクラマ暦 1680 年アッシーの岸でサーワナ月の黒半第 3 日土曜日にトゥルシーダースはこの世を去った[D119]。

『上人伝要解』を毎日読誦する者は誰であっても、パールワティー女神とシヴァ神とハヌマーン神の恩寵とラーマ神の庇護を得るであろう[D120]。

ヴィクラマ歴 1687 年カールティク月の白半第 9 日に、自らの読誦のために、ベーニー・マーダオ・ダースは[本書を]著した。

ベーニー・マーダオ・ダース著『上人伝要解』完。

****

聖なるシャーンディルヤ・ゴートラに生まれた神聖なるラーマラクシュマニ・トリパーティーの息子ラームダースによる書写。ヴィクラマ歴 1848 年アーシュヴィン月白半勝利の第 10 日金曜日。

****

使用テキスト

Beṇīmadhavadāsa, n. d., *Mūla Gosāī-Carita*, Gorakhpur: Gita Press.

参考文献

Caturvedī, Sītārām, et al. ed., 1973, *Tulasī-granthāvalī*, 3rd. vol., Kāśī: Akhil Bhāratīya Vikram Pariṣad.

McGregor, Ronald Stuart, 1984, *Hindi literature form its beginnings to the nineteenth century*, A history of Indian literature, Vol. VIII, Fasc. 6., Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

長崎広子 2011, 聖者トゥルシーダース伝の変容,『説話･伝承学』, 第 19 号, pp. 159-78.

---

[45] 死期の迫った者の口にカミメボウキの葉と小片の金を含ませるヒンドゥー教の慣習。

2014, ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』(上), 『印度民俗研究』, 第 14 号, pp. 21-44.

Pāṇḍe, Ratnākar, ed., 1983, *Dr. Śyāmasundaradās ke aprakāśit nibandh*, Vārāṇasī: Hindī Pracārak Saṃsthān.

Snell, Rupert. 1994. "Barvai' Metre in Tulsīdās and Rahīm', in Alan W. Entwistle and F. Mallison (eds.), *Studies in South Asian Devotional Literature*, pp. 373-405. New Delhi: Manohar.

Śyāmasundaradās & Pītāmbaradatt Badthvāl, 1931, *Gosvāmī Tulasīdāsa*, Allahabad: Hindustani Academy.

Tulasīdāsa, S.V. 2060 (2003), Hanumāna Prasāda Poddāar ed., Śrīrāmacaritamānasa, Gorakhpur: Gita Press.

＊本研究は JSPS 科研費 15K02455 の助成を受けたものである。

ハール）に来た。サンワルーの息子であるマンガルーは牛飼いで、神とサードゥーの世話に熱心で、牛乳を搾って与えていた。恩寵を与えた。「きっぱりと盗みをやめよ。お前の家系は続くだろう」

それからベーラー・パターラ[村]にやって来た。そこでダニーダースが自らの苦しみを語った。大罪を犯し、明日死ぬのだと自分の苦しみを語った—「ラーマの神像が目の前で神饌を食べていると言って、[実は]ねずみに食べさせたのです。ああ尊者よ、ラグナート・シン王はごまかしを知り、怒って言いました。『ラーマの神像が私の前で食べなければ、お前を必ず絞首刑に処す』と」すると上人は慰めた—「サードゥーよ、食事を作りなさい」神像が皆の前で食事をしたのを見て、聖者（トゥルシーダース）は次のように語った—

トゥルシーダースは語る。偽りの信者の名誉さえ主は守る。
施主が愚かな司祭にさえ布施を与えるように[D52]。

自分の家に吉兆をもたらすために、最高の主人（ラグナート・シン王）は上人を連れて行った。そこで信徒ゴーヴィンド・ミシュラに会った。彼の視線で鉄の塊さえ溶けた。上人は村の名前を変更させ、その名はラグナート町になった[15]。

そこから出発し歩き回りながら、リシはハリハラ・クシェートルにやって来た。それから川の合流点であるとき沐浴し、歩き回る人（トゥルシーダース）[16]はビデーハプリに近づいた。ビデーハの娘（シーター）は少女の姿をとり、外に出てきて[トゥルシーダースに]キールを食べさせて去った。真実を知った時、[喜びは]語りつくせない。心の中で[シーターの]ご加護と感謝した。

バラモンたちは[トゥルシーダースが滞在している]ことを知って取り囲んだ。そして自らのつらい苦しみを語った。悪徳の太守

---

[15] ラグナートは、ラーマ神とラグナート・シン王の両方を指しており、その名にちなんで町の名を変更させた。
[16] chapadī. 「黒蜂」から「歩き回る人＝トゥルシーダース」と解釈した。

は大変残酷で、彼は１２の村の仕事と生計を奪った。[上人は]哀れに思い、[己の]なすべきことを考え、風神の子（ハヌマーン神）を念想した。[太守を]罰して再生族の家族を幸せに戻した。

ミティラーからカーシーに行った。ヴィクラマ暦 1640 年になった。穢れのない愛着をもって『ドーハーヴァリー』を編纂した

ヴィクラマ暦 1641 年アガハン月の白半７日日曜日に、読誦のために『ヴァールミーキ・ラーマーヤナ』を再び書いた。

ヴィクラマ暦 1642 年ヴァイシェーク月白半シーターの誕生日に愛で潤された『サトサイー』[17]を著し始めた[D56]。

土星が魚座に降りると、カーシーの町に疫病がはやった。人々はとても哀れな状態に陥り、聖者のもとに助けを求めてやって来た。「ああ主よ」と大きな叫び声を挙げ、全く静止できなかった。「創造主よ、ハリのしもべよ、お助けください」慈悲深い上人は悲しみを聞き、カヴィット詩[18]を著した。慈悲の海（ヴィシュヌ神）に懇願し、疫病を追い払った[D57]。

詩人ケーシャブダースは大変な風流人で、高貴な詩人ガナシュヤームはナブ村の住人[19]であった。詩人は[トゥルシーダースについて]知って、会いに行った。外に立って、[お会いしたいと]伝えた。それを聞いてトゥルシーダースはこう言った—「詩人の性質

---

[17]トゥルシーダース研究者の間ではこの作品は真作とは認められていない。

[18] ここでいうカヴィット詩とは作品集『カヴィターワリー』(7.169, 176, 181)にあるベナレスの疫病に関する詩を指すと思われる。なお、前編最後にもカヴィット詩を著したと記されている[長崎 2015:44]ことから、『カヴィターワリー』は断続的に創作されたカヴィット詩を集めた作品集となる。

[19] Nabha を地名と解釈したが、所在地は不明。なお、Nabha には「空」の意味があり、その場合、ガナシュヤームが「空の住人」すなわち「空を駆け巡ることができる超自然的な能力を有している」となる。